

研究・調査報告書

報告書番号	担当
213	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol drinking pattern during pregnancy and risk of infant mortality. 妊娠時の飲酒習慣と乳幼児死亡率のリスク	
執筆者	
Strandberg-Larsen K, Gronboek M, Andersen AM, Andersen PK, Olsen J.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Epidemiology. 2009;20(6):884-91.	
キーワード	
妊娠、飲酒習慣、乳幼児死亡率	
要 旨	
目的： 妊娠時少量の飲酒や時折の過度の飲酒の安全性については未解決のままである。母親の平均的な飲酒と過度の飲酒（5杯以上）と乳幼児（新生児および新生児期後の乳幼児両方）の死亡率の関係について研究を行った。	
方法： 1996年から2002年に行われた Danish National Birth Cohort に登録された79216人の一人の子供が生まれた母親について、妊娠中の飲酒の情報を得た。乳幼児の死亡率と死亡原因の情報は国の記録または診療記録から得た。	
結果： 生後1年の間に279人の子供が死亡し（0.35%）、うち204人は新生児であった。乳幼児死亡率は飲酒と関連はなく、たとえ週に4回以上の飲酒または3回以上の過度の飲酒水準であっても関連は見られなかった。新生児期後の乳幼児死亡率は、週に4回以上の飲酒（ハザード比=3.56[95%信頼区間=1.15 - 8.43]）と3回以上の過度の飲酒（ハザード比=2.69[1.27-5.69]）と関連があった。満期出産に限定した分析では、新生児死亡および新生児期後の乳幼児死亡率ともに、週に4回以上の飲酒または3回以上の過度の飲酒と関連が見られた。	
結論： 満期出産児の間で、妊娠時の少なくとも週に4回の飲酒または3回以上の過度の飲酒は、乳幼児の、特に新生児期後の乳幼児期において、死亡率のリスク増加と関連がある。	